

検討テーマ：「地域の実状に応じた防災訓練のあり方について」

(○：前回までの意見、■：今回出た意見、●：市長の発言)

	課題	方策
防災訓練の内容	<p>○佐野と見晴台は地域の特性が違うが、協働・協力体制を敷いていきたい。</p> <p>○現実に即したのかどうかは疑問。</p> <p>●佐野は建物が古く倒壊が考えられる。ディグ(災害図上訓練)を使った訓練を行ってほしい。</p>	<p>○防災訓練はただ型どおりで意味が無いので、ディグ(災害図上訓練)を参考にし、住民に新たに説明していきたい。</p>
災害時の避難・救助	<p>○中心市街地から遠く情報が届きにくいこと、けが人が出たときの対応などが課題。</p> <p>○携帯や電話など連絡方法が遮断された場合、衛星電話など市本部との連絡手段が必要。</p> <p>○見晴台は学校から遠い。家族間の連絡をどうとるか、子どもを迎えにいけない家はどうか。</p> <p>○立地は三島市役所より裾野市役所が近い。長泉町など近隣の市町と情報の共有。</p>	<p>○消防団は無線を利用。地域に無線の免許所有者もいる。1・2台置いてはどうか。</p> <p>■佐野小に本部を置き各地区から連絡を受けるのだが、電話が使用できない場合の連絡網が不安。無線を使用した連絡方法について消防と相談したい。</p>
要援護者の支援	<p>○災害時の要援護者支援を躊躇している。</p> <p>○市の要請を受け、要援護者調査を実施し、町内会にも報告した。連携していきたい。</p> <p>○小さい子どものいる母子家庭なども網羅して欲しい。現役の方は昼間不在。年寄りと子供しかいない平日の昼間が一番心配。</p> <p>○精神的な病の方は、避難できないのではないかと心配している。</p> <p>○急こう配なので足腰の悪い人はすぐに避難できない為、工夫が必要である。</p>	<p>○「向こう三軒両隣」という考えがとても大事。高齢者の事を気にかけてくれるとありがたい。</p> <p>○自分の命を自分で守るのは基本だが、守れない人もいる。要援護者リスト以外の弱者にも支援が必要。</p>
地域の連携	<p>○町内会長と民生委員がタッグを組むと、連携・協働がスムーズに行く。</p> <p>■見晴台は比較的新しい町なので、住民の意思の疎通が難しい。若い世帯には組活動はどうでもいいという人もいる。</p>	<p>○見晴台には民生委員と自治会の中間のような役割の「やじうまクラブ」が熱心に活動している。</p> <p>○佐野小体育振興会では、リーダーシップのとれる人材を育成している。年配者中心の「やじうまの会」からも行事への参加があり、現役世代と年配者との交流も出来ている。</p>

(○：前回までの意見、■：今回出た意見、●：市長の発言)

	当面の取組み	取組みの担い手／アイデア
防災訓練の内容	<p>○佐野から見学がある。地域性は異なるが参考にしてほしい。</p> <p>■見晴台では今回は組ごとに集合⇒公園に集合⇒水消火器訓練、避難訓練、炊き出し等を実施。訓練内容は画一的にせず、毎回異なる内容にしている。</p> <p>■佐野は、午前8時各避難地に集合⇒点呼⇒各家庭や要援護者の安否確認⇒各地区の行動内容について話し合う。午後、佐野区全体が小学校に集合し、家が倒壊した場合の行動、水消火器訓練、防災に関する質問や講演を実施予定。</p> <p>■今後は保健委員も訓練に参加してほしい。</p> <p>■たかが訓練、されど訓練。東日本大震災の釜石の奇跡の例もある。訓練を意識化し継続することが大事。</p> <p>■訓練は実施してみても課題が出てきたところで、次どうするか考えていく。1つずつ前進。</p> <p>■自治会連合会の理事研修で、大臣表彰を受けた泉自主防災隊を視察した。印象に残ったことは、自治会が全て行うのではなく、できること・できないことをはっきりさせていること。</p> <p>■避難所の実地体験をすることで、各自やらなければならないことがわかってくる。</p>	<p>■防災訓練時、家族が無事なら避難完了のプレートを門扉あるいは玄関に掲げる取組みを実施。訓練に参加できない場合も同様、参加意思を示す。プレートを基準に安否確認に回る。黄色いハンカチと同じこと。</p> <p>●保健委員の役割として災害時の対応を考えてほしい。保健委員会議で保健委員の役割を明確にし、防災訓練等幅広く活動してほしい。</p> <p>■泉自主防災隊(浜松市中区)の取組の紹介</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自治会役員は救出救助が主。救助活動終了後、避難所に向かう。避難所運営は避難者たちがグループを作り、リーダーを決め自主運営する。 ・避難訓練は約500名集まる。全員が小学校の体育館に実際に入り、スペース確保などの実地体験をする。 ・備蓄は基本的にしない。ご飯は炊くけれど食糧は各自持参。

(○：前回までの意見、■：今回出た意見、●：市長の発言)

	当面の取組み	取組みの担い手／アイデア
災害時の避難・救助	<p>○連絡網（体制）の確立</p> <p>■子ども達が在園中に災害発生した場合、給食室や和室があり布団も持参しているので、保護者が迎えにくるまで職員が待機して生活する。備蓄もしている。子ども達は慣れているところが一番安心する。保護者が帰宅困難者になることも有り得るので安心して預けてほしいと思っている。</p> <p>■避難所は体育館を想定。地域の方に体育館と防災倉庫の鍵を預けている。</p> <p>■幼児から老人まで全員避難場所を知っていることが理想的。</p> <p>■佐野の場合、家が倒壊しても物置や車庫等があり避難所生活者は比較的少ないと思う。</p> <p>●避難所生活をする人は倒壊などにより、家が使用できなくなってしまった方だけ。</p> <p>■災害時、民生委員や役員が地域にいるとは限らない。特に日中は、地域にいそうな人達による安否確認、支援体制が必要。</p> <p>■災害時は連絡をとりあい正しい情報を共有することが必要。災害時の連絡に無線を使用する場合、どこに災害本部を置くのか話を詰めたい。</p> <p>■小学校には市の災害対策本部との通信手段がある。</p>	<p>■組長を評価し利用すると良いのではないかと。佐野では各避難地には4組程集まるので組長が必ず数名いる。組長は1組10～15世帯なので自分の組や要援護者を把握している。組長と一緒に取組む。</p> <p>●佐野と見晴台で一緒に避難所運営について協議してほしい。（市では避難所運営マニュアルを作成中）</p> <p>●錦田小・錦田中で避難所運営隊を別に組織する取組みを実施。1世帯50円運営隊事務費として拠出。参考にしてほしい。</p> <p>●無線は全消防団に渡している。基本的には災害時に使用していいということだと思うが、無線の運用に関しては団本部に確認してほしい。</p>
要援護者の支援	<p>○町内会で災害弱者の把握</p> <p>■要援護者についてはやじうまクラブと連携し、連絡をとりながら活動している。</p> <p>■基本は自分の命は自分で守る。まずは自分、家族、隣近所の順。自治会の活動（本部の立ち上げ・救援）もその後。要援護者も各役員が家族の安否確認後に救援に向かうことを理解してほしい。</p> <p>■防災委員と要援護者のいる地区を確認し、災害時の班行動を話し合っていきたい。</p>	<p>■やじうまクラブはボランティア。登録は15名、現役8名。代表は自治会役員で、メンバーは自治会OB。あいさつ運動実施。また民生委員と一緒に一人暮らしの高齢者や高齢者世帯を訪問するなど、見守り活動も実施。</p>

(○：前回までの意見、■：今回出た意見、●：市長の発言)

	当面の取組み	取組みの担い手／アイデア
地域の連携	<p>○団体の繋がり、輪を広げる。</p> <p>■町民に対して、防災・地震対策のPR、意識付けをしていかななくてはならない。</p> <p>■一番大事なことは祭りや会議等を通した人と人とのつながり。</p> <p>■今夏、佐野校区の子ども達と保護者で防災キャンプ実施。子ども達51人、保護者を含め100名前後参加。消防団・見晴台自治会・佐野自治会が協力してくれた。地域の各組織が協力してくれたことは子ども達にとって大きな経験になった。</p>	<p>○各団体の活動に参加し、きずなをつくる。</p> <p>■中長期的な自治会・組単位の活動を検討中。組長と防災関係者を1名入れた3～4人が組単位で、祭りや防災など様々な活動をまわし、自治会はこれをバックアップする形。</p> <p>■祭りや防災訓練、文化祭等、イベント時は、組長を中心にまず各ステーションに集合するようになるといい。近所の把握ができる。</p> <p>■PTA が子どもを持つ世帯と地域の接着剤になるといい。日々の声かけの積み重ねが大事。</p>